

場ヨリ硫黃岳ノ頂上ハ南六十度西ニ位シ其距離四軒、一物ノ之ヲ遮ル物ナク、浴舎ノ樓上座ヲニシテ噴煙上騰ノ光景ヲ約三十度ノ仰角ヲ以テ眺望スルコトヲ得。

第二節 硫黃岳ノ概況

硫黃岳ノ標高ハ二千四百四十五米餘ニシテ其二千米以上ノ地ハ四面殆ンド相似ノ乳房狀ヲナスト雖、二千米以下ハ稍、複雑ナル地形ヲ呈ス。(第七圖版)概シテ東麓ハ頂上ヨリ約一千米低ク、西麓ハ約一千五百米低シ、而シテ此等千有餘米ノ深谷ハ山ノ殆ンド四圍ヲ包繞シ唯北及南ニ於テ辛フジテ標高二千米(頂上ヨリ約五百米低キ)ノ連嶺ニ依リテ相接續スルノミナリ、而モ其レ等四圍ノ大溪谷ヲ隔テ、北東南ノ三方ハ全ク二千米ヲ出入スル大山塊群ヲ以テ包圍セラレ、唯北七十度西ヨリ南五十度西ニ至ル六十度ノ間、即船津町—高山町方面ノミハ遠ク打開ケ飛驒ノ山地ヲ超エテ遙ニ飛加境上ノ白山火山ニ對ス。

硫黃岳ノ山頂ニ舊噴火口アリ近頃屢噴火スルハ此噴火口内ニ於ケル活躍ナリ、又頂上北側ニハ硫汽孔ノ點在スルモノア

リト雖勢頗ル微弱ナリ。

第二章 噴火事項蒐錄

第一節 明治以前ニ於ケル噴火ニ就テ

所謂天正年間ノ破裂 明治以前ニ於ケル硫黃岳ノ變動ニ關スル記録ニ就キテハ未ダ見聞スルコトヲ得ズ、唯西麓岐阜縣吉城郡上寶村東ノ諸區ニ於ケル口碑ニ依レバ「今ヨリ二百年前硫黃ヶ岳破裂シ其噴火ハ七年間繼續シタリ」ト又明治四十二年九月二十六日岐阜縣高山測候所長ノ報告ニ依レバ「天正二年(西曆千五百八十五年明治四十五年ヨリ三百二十七年)ニ硫黃岳大噴火アリ、西麓白水ノ谿谷ヲ埋メ現今ノ中尾區ニ在ル平地ヲ作りタルモノナリ」ト之亦口碑ニ因リタルモノナルベシ。

○(前略)人ノ風評ヲ聞知スレバ昔二百年前當岳ノ噴火シタル時ハ七箇年間噴煙シ居タリト云フ、依テ今回モ七箇年位ハ噴煙止マズト言ヒ居レリ。(岐阜縣吉城郡上寶村東、巡查駐在所勤務横幕若之助氏ノ報告、明治四十年十二月六日)

○(前略)中尾區ハ蒲田ヲ北東ニ去ル二十餘丁(中略)蓋シ天正十二年硫黃岳大噴煙

ノ際其噴火ニヨリ地勢ノ關係上此溪谷ニモ岩石ノ溶解セシモノ流出シ一層ヲ成シ、其後幾年ノ星霜ヲ經テ今ノ中尾區ヲ產出セシモノナラン。(中略)又中尾區長ノ談話中區内地下三四尺ヲ掘リ下グレバ岩層ニ大小ノ丸キ穴アリ、其ノ穴ノ中ヨリ腐レタル木梢ノ如キモノ出ツ(下略)。(岐阜縣高山測候所長ノ實地踏査報告、明治四十二年五月二十六日)

○中尾區ニ傳ハル口碑ニ依レバ、同區ノ地下ニハ六體ノ石地藏尊ノ埋没セシモノアリ、是レ舊ノ中尾ノ村央ニ在リシモノナリ。又中尾區ノ地下ヨリハ樹木(主トシテ「ツガ」)ノ枝付ノ儘ナルモノヲ發見スルコトアリ、然レドモ皆人工ヲ加ヘタル模様ナシ。又曰ク、中尾區ヲ埋没セシメタル岩石泥土ハ蒲田區ヲ埋メテ後尙流レ下リテ今ノ神坂區ノ東境ニ至リテ停止セリ、故ニ現今ノ蒲田區ハ其後神坂區ヨリ移住シタルモノナリト。(蒲田區ハ溫泉ノ發見ニ依リテ開ケタル地ニシテ同溫泉ハ今ヨリ三百餘年以前ノ發見ナリト傳ヘラル。蒲田溫泉記ニ曰ク「飛州高原郡蒲田之湯者未詳其所濫觴也。世傳天正年中東濃邊之下民云々」)(中尾區民ノ談)

之ヲ地形及地質ニ依リテ察スルニ、現在中尾區ガ位置スル臺地ハ硫黃岳ノ北側中尾峠爆裂火口ヨリ流下セシ泥流ヨリ成リシモノニシテ、其泥流ノ末端ハ神坂蒲田間ノ峠ニ殘レリ。由是觀之前記ノ口碑ト符合スル點少ナカラズ。故ニ現在中尾區ノアル土地ガ硫黃岳ヨリノ泥流ニ因リテ一時埋没セラレタル土地ナルベキハ信ズベシト雖其時代ニ至リテハ詳ナラズ、或ハ天正十三年ト云ヒ或ハ二百年程以前ナリト云フ。今天正年中ニ於ケル地變ヲ見ルニ天正十三年十一月二十七日越中利波郡

ヨリ飛驒白川村(硫黃岳ヨリ西方六十五里射水川ノ上流地區)ニ強キ地震及大ナル山崩アリテ死傷者ヲ多ク出シタルコトアリ。

○歸雲城、白川郷保木脇村ニ在リ(中略)然ルニ兵庫頭氏理ガ時天正年中地震シテ大山嶺落城廓滅却シテ人馬皆死ス於茲內島家斷絶スト。

○三壺聞書曰「天正十三年十一月二十七日越中利波郡木船城大地震ニテ三丈バカリ震沈シ、故ニ其レヨリ今石動ヘ地ヲ引キタリ、竝ニ此時飛驒州阿古白川ト云フ町在家三百餘ノ所ナルガ地震ニテ高キ山崩レ落チテ男女數百人一人モ殘ラズ人家ト共ニ三丈許ノ下ニナリテ在處ノ上ハ草木モ無キ荒山トナリヌ云々。

○天正十三年十一月二十九日(西曆千五百八十一年一月十八日)山城、大和、和泉、河内、攝津、三河、伊勢、尾張、美濃、飛驒、近江、越前、加賀、北陸道、讚岐ニ大地震アリ。

其他天正年間ニハ東海道ニモ大震アリ、兎ニ角地變ノ多キ時代ナリシヤ明カナリ、而シテ火山ノ噴火ハ地震ト相伴フノ例少ナカラズ、彼ノ寶永四年ノ富士山ノ噴火ト僅ニ五十日ノ差ヲ以テ起リタル、寶永ノ大地震及マルチニツクトグアテマラ地震ノ如キ二十日ノ差ヲ以テ起ル等アリ、共ニ地殼ノ變動ニ因ルモノナレバ同時ニ起ルコトモ偶然ニ非ラズ、サレバ天正年間ニ硫黃岳ノ噴火アリタルヤモ計リ難シ。然レドモ又此等ノ地震ノ事實ガ誤リ傳ヘラレタルヤノ疑ヒナキニ非ズ、然カモ天正年中ニハ飛驒國內兵亂打續キ信州方面ヨリ阿房峠アボツヲ越ヘテ飛驒國ニ多勢ノ軍隊侵入セルコトアリ、又平湯蒲田等ノ溫

泉ノ發見セラレタリト云フモ此頃ナル等、硫黃岳附近ハ比較的交通ノ活潑ナリシ時代ナレバ若シ噴火爆裂等ノ事變アリタランニハ多少其記録ノ傳ハラザル事モアラジト思惟セラル。要スルニ此年代ニ關シテハ未ダ詳ニスルヲ得ズ。

元文年間ノ山崩 元文年間(西曆千七百三十五年頃)割谷火山ノ東側ニ山崩

アリテ現今上高地溫泉場所在地ノ西方ニ大ナル「押出シ」ヲ造リタリ、故ニ割谷山ヲ上高地ニ於テハ元文山ト呼ブ。天保八年(西曆千八百三十八年)ヨリ中尾峠ノ道ハ公道トナリ、中尾區及島々區ニ番

所ヲ建テタリ、當時ハ交通稍盛ニシテ隨テ上高地ノ溫泉場モ此ノ當時創設セラレタルモノナリ、而シテ此頃ヨリ燒岳ニハ噴汽孔アリ又硫黃岳ノ北側ニモ小硫汽孔アリタル由ナリ。然

ルニ安政三年此番所ヲ廢シ此道ノ通行ヲ禁ジタルニ由リ上高地溫泉場モ自然廢滅ニ歸シ、隨テ硫黃岳ノ狀況モ詳ナラス。按ズルニ明治以前ニ於テ硫黃岳ハ其山體構成セラレタル後、中

尾峠及下堀ノ二爆裂アリテ白水澤シロミヅ及上高地平野ニ泥流ヲ溢流セシメ其後累年ノ水蝕作用ニヨリテ白水澤ニ於ケル泥流ノ一部剝除セラレ、中尾峠爆裂火口底及燒岳ノ一側ニ硫汽孔ヲ有

シ、且ツ頂上ニハ岩塊ニヨリテ半バ充填セラレ、偃松ヲ點綴セル摺鉢形ノ舊噴火口ヲ存シ、大體現今ト同様ナル狀況ヲ以テ

明治ノ時代ニ入りタルモノ、如シ。(第五圖版第一圖參照)

第二節 明治時代ニ於ケル噴火事項

明治二十二年(西曆一千八百九十九年)七月二十四日午後七時中尾區外谷ソデタニ

大ナル山崩アリ(第十八圖版參照)樹木五千本許埋没シ周圍約一里(上

村役場員ノ報告ニハ一里トアレ)ノ池ヲ作リタリ。

蓋シ此地ハ古生紀岩層ニ酸性岩脈ヲ交ヘタル急峻ナル山坡ニ

シテ本區域竝ニ其附近ニ於テハ最モ崩落シ易キ地質ノ所ナ

リ。此地變アリシ頃ヨリ燒岳ノ噴煙漸次其勢ヲ強クシ爲メニ

燒岳ノ樹木ハ漸次立枯トナリ始メ(第十二圖版參照)且硫黃岳北側ノ

中尾峠爆裂火口中ニアリシ硫汽孔ハ其勢微弱トナルニ至リタ

リト云フ。

其後約二十年間ハ大ナル變化ヲ認メザリシガ明治四十年十

二月八日始メテ頂上ニ噴煙シ漸次旺盛ニ趣キ、四十二年春ニ

至リ最モ盛ニ活動シ翌四十三年ハ小活動ニ止リシモ四十四年

六月ニハ又々盛ナル活動ヲ演ズルニ至レリ。而シテ四十年以

來頂上ノ新噴火口ヨリ立チ上ル噴煙絶ユル時ナク常ニ多少ノ

火山灰噴騰シ風ニ從ヒテ特ニ西北ヨリ西南方面ニ多ク降灰シ

ツ、アリ。

次ニ四十年以來ノ噴火ニ就キ少シク詳述スル所アラン。

(1) 四十年十二月八日

頗ル静ニ噴煙シタルモノニシテ山麓ノ村民ハ之ヲ知ラズ。惟
フニ舊噴火口底ヨリ噴煙シタルモノナルベシ、降灰ハ西方ヨ
リ西南ニ二十五糎ニ達ス。

○午後三時降灰凡ソ一分積ル(吉城郡船津)

○午後二時ヨリ降雪ト共ニ降灰三分ニ達セリ(高山測候所)

(2) 同年十二月十一日

初メハ静ニ、漸次旺ニ噴煙ス。新噴火口ハ舊噴火口底ノ中央
(第五圖版第 二圖参照)降灰ハ東方ヨリ東南四十餘糎ニ達ス。

○午前十時ヨリ十一時マデ降灰區域ハ郡下波多村、山形、和田、新、神林、島立ノ六

箇村ニ及ビ當時ノ風位北方ニシテ降灰アリシハ午前十時ヨリ十一時ノ間ナリ降
灰ハ極メテ細微ニシテ灰白色ヲ呈シ肥料過燐酸ニ髣髴タリ、積寸ハ數字ニ表ス
ベキ程ニ非ズ尤モ指頭ニテ形狀ヲ畫シ得タル位ニ積リ、十一時以降ハ降灰ナシ
(東筑摩郡役所)

○午後九時頃ヨリ降灰ヲ始メ區域ハ殆ンド郡内一般ナリシガ如シ、其ノ中多量ノ
降灰ハ安曇村内島々谷及大野川方面ナリシモ其ノ積量ハ不明ナリ、他ノ各村ハ
大低家屋ノ外椽側面ニ於テ其ノ降灰アリシヲ知ル位ナリキ。

○初メハ静ニ噴煙シ漸次盛トナリ動鳴アリ、區民恐懼シ農作用ノ牛ヲ牽キテ急遽
蒲田又ハ今見ニ避難シ三四日ヲ經テ歸村セリ、然レドモ當區ニハ降灰ナク信州
方面降灰セリ(高山測候所長報告ノ一節中尾區長小瀬氏ノ談)

(3) 四十年十二月二十三日

噴煙稍々旺トナリ東南方ニ降灰ス。

○奈川村ノ入山角^{ニシヤツツノガタヒラ}平部落ニ於テ午後三時噴煙ヲ認メ翌朝ニ至リ山野ノ積雪一帯
ニ黑色トナリタルヲ見タルノミニテ其前後ニハ降灰更ニ無之此時ノ降灰ハ凡ソ
二分位ニ候(西筑摩郡役所)

(4) 四十一年三月八日

四十年十二月ヨリ暫ク静謐ナリシモ、再ビ稍々旺ンナル噴煙ヲ
ナシタルモノニシテ山麓地方ニテハ注意セザリシ模様ナリ、
西南方ニ降灰ス。

○明治四十一年三月八日、午後ニ至リ風勢強ク時々吹雪ヲ起シ夜ニ入り風勢衰頽
セシモ大雪ハ依然トシテ下降セリ、午後六時觀測ノ際積雪ヲ驗セルニ二三分程
灰ヲ雪ノ上ニ堆積シテ淡キ褐色ヲ呈セリ、降灰ハ蓋シ午後二時乃至六時ノ間ニ
始マリ、ナルベシ、吉城郡船津地方ニテハ當日午後三時頃ヨリ降灰アリ、一分程
積レリ(高山測候所)

(5) 四十一年七月二十八日

(6) 四十二年一月二十日

四十一年ハ概シテ静穩ナリシガ、四十二年ニ入ルヤ活動漸次
旺盛トナル、一月二十日ノ噴火ハ稍々著シキモノニ屬シ鳴響ハ
西方六糎ニ達シ降灰ハ東北方長野方面七十五糎ニ達ス。

○北安曇郡七貴村、陸郷村方面ニ降灰アリ二十一日ハ南安曇郡粕谷町ニ降灰ア
リ、午後ヨリ十一時マデ南安曇郡東穂高村ニ降灰アリ、夜下高井郡山ノ内及夜
間瀬村ニ降灰アリ夜十二時頃ヨリ上高井郡ノ西南部綿内、保科、井上ノ諸村及須
坂町ニモ降灰ス

○午後八時ヨリ翌二十一日午前二亘リ東筑摩郡阪北村字仁熊地方ニ降灰ス

○午後七時非常ノ鳴動ヲ發シ北麓吉城郡上寶村大字中尾ニテハ釣ラン著シク振動ス、平湯ヨリ西方へ一里半ヲ隔ツル同村大字田頃家ニモ鳴響聞ユ翌朝ニ至リ噴煙平日ニ倍ス(吉城郡平湯觀測所)

○煙ハ雲ノ爲ニ見エザリシモ大音響二十分間續キ信州方面ニ降灰アリタルガ如シ(中尾區、中島氏)

(7) 四十二年三月十日

○赤色ノ灰ヲ捲キ上ゲタルヲ見タリ。(上寶村中尾區長小瀨氏)○噴煙盛ナリシモ音響ナシ、煙ハ信州方面ニ向ヘリ(同區、中島氏)

(8) 四十二年三月十二日

○頂上破裂セル如ク中尾ノ地ニ降灰シ雪ノ上一分程積リシモ夜半雪ノ爲見エザリシ(中尾區、中島氏)

(9) 四十二年三月十三日

甚ダシキ鳴動ヲ伴ヒタル噴火ニシテ松本ニテ強震アリタリト報ズルモ硫黃岳山麓ニテハ地震ノ報告ナシ、降灰ハ東南三十糎ニ及ブ。

○南安曇郡ニテハ雪上ニ少シ許ノ降灰アリ、當夜地震ノ如ク戸障子ヲ動搖セシメタリ、前年秋ニ比スレバ少量ナリトス(松本測候所)

○夜十一時西方ヨリ(松本ニテ)激シキ鳴響アリシ後地震、噴煙、諏訪地方マデ灰ヲ降ラス、地震ノ爲時計止ル、夜上諏訪、岡谷附近ニ灰降ル。

○鳴動甚ダシク戸障子ヲ動搖シ十三日夜始メテ降灰アリタリ(上寶村中尾區長小瀨氏)○大火柱直立シ勢甚ダシク大音響十五回餘續ケリ而モ此音響ハ以前ト異ナリ石ノ崩ル、ガ如キ音ナリ(同區、中島氏)

(10) 四十二年三月二十三日

當日ノ噴火ハ明治四十年以來始メテ見タル大噴火ニシテ山頂噴火口ノ状態ハ多ク此際ニ變ゼシモノ、如シ(第五圖版第三圖參照) 降灰ハ北東北ニシテ、特ニ南安曇郡ニ多量ナルヲ見ル、余ガ同年六月上旬登山セル際ニ頂上三角點附近ニハ徑一米餘ノ岩塊散亂シ中尾峠ニハ徑十糎ノ岩片地表ヲ覆ヒ(第十二圖版) 上高地ニテハ徑五糎ノ火山砂屋上ニ積レルヲ見ル、又梓川ニ架セル河童橋ニ於テハ徑二糎ノ火山砂ノ地上ヲ被フヲ見タリ。

○本郡西穂高村ノ北部及有明、北穂高村ニ於テハ午後一時三十分ヨリ約二十分間降灰アリ、而シテ初メ常念嶽一帶ノ邊ヨリ中腹ヲ過ギ西穂高村ノ頂上ニ出デ忽チ滿天ニ漲リ一部ハ降下シ一部ハ南風ニ吹キ送ラレタリ、降灰ノ盛ナリシ頃ハ暗黒トナリ家内ニ吹入り、殊ニ有明地方ノ如キハ約十分間ハ物ヲ辨ズルコト能ハズ點火スル者サヘ有リタリト云フ、有明村ニテハ灰ノ積レルコト約一分ニ及ビタリ(南安曇郡役所)

○午後一時三十五分天俄ニ曇リ黒雲南ヨリ來リ白灰降下シテ地面ニ暈々タリ、約五分間ハ家内暗黒トナリ燈火ヲ點ズルニ非ザレバ顔面ヲ甄分シ得ザル程ナリキ(東筑摩郡阪北村役場)

○午後二時二十五分ヨリ同五時十分迄降灰アリ屋上ハ灰色ヲ呈ス、風向ハ南(南小谷村役場)

○南安曇郡豊科村以北ハ甚ダシク降灰アリシ模様ナリ(松本測候所)

○午後一時ヨリ南安曇郡穂高村、有明村、豊科村北安曇郡池田村及東筑摩郡麻績村、更科郡稻荷山町ノ各郡、長野市ニ大降灰アリ、就中池田村、穂高村附近ハ甚ダシク二寸餘積リ、北安曇郡松川、常盤ノ二村高瀨川ノ南岸有明村、須坂、池田、中野、大町、豊科ニモ降灰アリ、當時南乃至南西ノ風(以上新聞記事)

○噴煙ハ唯石ヲ捲キ上ゲシノミナラズ電光ノ如キ火條ヲモ見受ケタリ、其岩石當地マデ飛ビ來ラズト雖山中ニ落下スル有様ヲ望見スルニ、大ナルモノハ徑七八寸位アリテ恰モ子供ノ手鞠ヲ曲取スルガ如ク見え、甚シク身體ニ感ズル動搖ハ、橫振ノミニシテ上下スル等ノ事ハ更ニ無カリキ、且振動ノ際ハ爐ニ掛ケアル鍋或ハ鐵瓶ノ動搖ハ約五寸位ニ及ビ、戸障子ハ開閉スルヲ得ズ故ニ開ケ放シアル所ヨリ逃ゲ出デタリ云々(高山測候所長報告ノ一節中尾區長ノ談)

○午後七時頃何ノ前兆モナク「ゴー」ト鳴動シテ戸障子振ヒケレバ皆戶外ニ逃ゲ出ヅ、山頂ハ黒煙ヲ以テ包マレ時々「ドンドン」ト音シテ電光ノ如キ閃光ヲ見タリ、中尾區ハ山ニ近キ所故煙ノ下ニナリテ唯此閃光ヲ見タルノミナルガ、中尾區ヲ西ニ距ル事一里許ニアル田頃家村ニ於テハ煙中ヨリ赤熱セル岩塊ノ手鞠ノ如ク噴出スルヲ見タリ而テ其噴出スル毎ニ「ドンドン」ト云フ音響ヲ聞キ其數五十回以上ヲ算ヘタリト云ヘリ、ヤガテ噴煙中尾ノ天ニ漲ルト見ル中、徑五分大ノ砂石「バラバラ」ト降下シ恰モ降雹ノ如クナリ、斯クノ如キ有様八十數分間許モ繼續セシガ田畑等ノ被害ハ皆無ナリ(中尾區民ノ談)

○高原川ノ下流硫黃岳ヨリ六里許ノ所ニテ見タルガ鳴動ハ感ジタルモ火光ハ見ザリキ(平湯觀測所主任大霜氏ノ談)

○於上高地、夕刻「ドードー」ト地震ヒ約三分時許上下ニ振動シ帯戸(板戸)ハ外レンバカリニ鳴リ渡リタリ、急ギ戶外ニ出デ、見ルニ燒岳(硫黃岳ノ意)ハ黒煙ニ包マレ、何物ヲモ辨ゼズ、唯岩石相打チ又ハ樹木ヲ打チ倒ス音響々然ル内砂灰降り來リ硫黃ノ臭氣堪エ難シ、ヤガテ夜ニ入りケレバ其後ノ模様ヲ詳ニセズ(上高地獵師上條嘉門治ノ談)

硫黃岳頂上ヨリ低キコト一千三百米ナル中尾區ニ於テハ、橫振動ヲ感ジ頂上上ヨリ約一千米低キ上高地溫泉場ニテハ上下動ヲ感ジタリトセバ其際爆裂作用ノ中心ハ硫黃岳頂上ノ下約

千三百米ニアリシガ如ク想像セラレ、若シ夫ヲ以テ熔岩溜ノ如キモノト見做サバ地下ノ熔岩ハ即チ現今ノ噴火孔底ヨリ約一千米深所ニ存在セシモノナランカ。

(11) 四十二年三月二十九日

○午前七時ヨリ豊科附近ヨリ東筑摩郡東川中村一帶少量ノ降灰アリ。

(12) 四十二年四月九日

○午前十時信州方面ニ降灰アリタリ音ナシ(中尾、中島氏)

(13) 四十二年四月二十六日

鳴響ヲ伴ヒ稍々旺ナル噴火アリ、高山測候所長ノ報告ニヨレバ此際舊噴火口ノ西端ニ近ク新噴火口ヲ生ジタリト云フ、降灰ハ東方。

○正午ヨリ午後一時迄少許ノ降灰アリ、前日ヨリ今朝ニ至リ寒氣頓ニ増シ今朝結氷ヲ見ル前日朝降雨アリ、一度霽レ復々曇リ少許ノ雪舞フ、降灰ハ北方ヨリス、土地面ニ認ムベカラザルモ人體衣服等ニ點々セルモノハ歴々辨ズベシ(東筑摩郡朝日村)

○午前十一時頃少量ノ降灰アリ燒岳方面ニ當リ鳴動有之候ニ付之ヲ調査スルニ降灰ノ區域ハ分明ナラザルモ部内安曇村字島々ニ於テ十分間許降灰アリ鳴動同村大野川ニ於テ聞キタルモノ有之趣キニ付信飛國境ノ燒岳平素ヨリ多量ノ噴煙有之タルモノト思考候(梓村役場)

(14) 四十二年五月七日頃

○蝶ヶ岳方面ニ降灰セリ。

(15) 四十二年五月十三日

鳴響ニ伴ヒ稍、旺ナル噴火アリ西方三十軒ノ地ニ至ルマデ降灰アリ

○午後十二時、一時間降灰アリ、午後十一時頃三回ノ鳴動ヲ聞ク翌朝ニ至リ吉城郡上寶村、田頭家附近ハ一分餘ノ降灰アリ、同所ヨリ九里西方ニ當ル神川村神原峠附近ハ樹葉ニ斑點ト粘液様ノモノ固着シ船津附近モ點々降灰シタルヲ見ル(船津警察署)

○午後十一時少音アリシモ降灰ハ多ク船津ヨリ下ニ及ベリ、或ハ加賀金澤附近迄モ降灰セリト聞ク、此時地震ヘリ、(中尾、中島氏)

(16) 四十二年五月十五日

同年三月二十三日ニ次グ大噴火ニシテ鳴響烈シク降灰ハ北東北ニ向ヘリ。

○午後九時ヨリ大鳴動アリ、同十時ヨリ十一時迄大町地方ヘ降灰ス。

○午後九時強震ニシテ三分間ニ亘リ大字中尾ノ如キハ將ニ家屋モ破壊セントスル位ニシテ(中略)當村ノ役場附近ハ七里ヲ離ツレド震動烈シキ爲メ人民一般屋外ニ出デ、(中略)灼熱セル熔岩其噴出シタル灰雲ニ反照シ宛ラ火焰天ヲ焦スガク(下略)(上寶村長小池氏報告ノ一節)

(17) 四十二年五月二十八日

小噴火降灰東北方。

○朝噴火シ南北安曇郡長野市ヘ降灰ス午前六時ヨリ降灰シ同六時半頃迄繼續シ樹木及地面ハ白色トナレリ(北安曇郡陸郷村役場)

○午前五時中尾ニ降灰アリ(中尾區中島氏)

(18) 四十二年六月一日

稍、旺ナル噴火ニシテ西麓一重ケ根ニ多量ノ降灰アリ、第十三圖版下圖ニ示ス所ノ新火口ハ當日ノ噴火ノ際新ニ開口シタルモノナリト云フ。

○午後六時十四分ヨリ約十五分大ニ鳴動セリ當日ハ晴天無風ナリキ。

午後八時ヨリ翌二日午前八時ニ亘リ又々鳴動ト共ニ降灰夥シ、其區域ハ殆んど全村ニ及ビ、殊ニ中尾、一重ケ根地方ハ甚ダシク恰カモ夕立ノ如ク降り、一面灰世界ト相成候下略(上寶村長、小池氏)

○一日午後七時破裂シ西南風ノ爲中尾ニハ灰降ラズ音モ少ク今回モ神阪一重ケ根ニ降灰セリ(中尾區長、小瀨氏)

○午後六時大音響水ク續キ、信州方面ニ降灰アリタルガ如シ(同區中島氏)

(19) 四十三年十一月十一日

○午前五時鳴動、噴火、松本方面ニ降灰ス。

(20) 四十三年十一月二十九日三十日

四十三年ニ於テハ活動極メテ不活潑ニシテ稍、旺盛ナリシモノ此ノ兩日ノ噴火トナス。諸報告ヲ綜合スルニ、二十九日夜ヨリ漸次噴煙ヲ増シ三十日午前六時ニ大音響ト共ニ猛烈ナル噴煙アリ、其後ハ漸次沈靜ニ歸シタルモノ、如シ降灰區域ハ遠ク諏訪方面ニ及ビタルモ、山頂ノ狀況ニハ大變動ト認ムベキモノ無ク、唯噴火口ノ位置少シク西遷シタルト、火口縁ノ少シク崩落シタルノミ。

○二十九日午後十時頃噴火、少量ノ降灰アリ、三十日午前六時頃俄然黒赤色ノ噴煙天ニ上リ、東南ニ吹き流シ、音響ヲ聞カズ、本村ハ薄キ煙ヲ以テ鎖サレ硫黃ノ臭

幅二乃至三米長サ十米許虧ケ落チテ火口擴大シ、孔底ハ四十二年調査ノ際ニハ音響ニ依リテ其深サ北縁ノ鞍部ヨリ約百三四十米ト概算シタルガ(石ヲ投ジ約五秒半乃至五秒ニシテ孔底ニ達シタル音響ヲ聞ク)今回ハ瓦斯噴出ノ音響ニ遮ギラレテ岩塊ノ着底セル音響ヲ聞クコトヲ得ザリシト雖其南側ノ一部ハ北側ヨリ下瞰スルコトヲ得テ目測約百五十米而シテ最モ噴煙ノ熾ナルハ其東端ニシテ四十二年ニ於テ最モ熾ナリシ圓錐形ヲナセル小噴火口ハ噴煙ノ爲メ充分ニ視察スルコトヲ得ズト雖漸ク衰滅ニ向ヒタルヤノ感アリ。又西方ニ偏シテ新ニ小火口ヲ生ジタルヲ見ル、概シテ噴煙音響共ニ四十二年ノ夏ヨリ熾ナリキ。(第十五圖版(上圖參照))

六月十日以後ニ至リ噴煙稍、減少シ、音響モ稍、減退セリ、十三日午後降雨アリテ山頂ハ雲ニ覆ハレタルモ中腹ニ在ル硫汽孔ハ噴汽常ヨリモ熾ンニ昇騰スルヲ見タリ、午後三時頃ヨリ午後五時マデ雷雨、午後六時晴ル。

(21) 四十四年六月十三日

○午後八時十分頃遠雷ノ如キ鳴動ト共ニ多量ノ灰ヲ噴騰シ、數回ノ爆音ト共ニ電光ノ如キ閃光ヲ見ル、其狀恰モ砲口ニ閃ク火光ノ如シ。鳴動ハ五分時ニシテ止ミ、上高地溫泉場附近ニハ二十五分間降灰アリ。同時ニ硫化水素ノ臭氣著シク室内ニ於テ鉛糖紙ハ直ニ淡黑褐色ヲ呈ス、積灰量ハ新聞紙二頁ノ上

ニ約三十四瓦ヲ算ス、其色ハ降下當時ニアリテハ多量ノ水分ヲ含有スルガ爲メニ黝灰色ヲ呈ス、該火山灰ハ眼中ニ入ルトキハ著シキ刺戟ヲ與フ、水溶液ハ著シク酸性ナリ。

中尾區ニテハ鳴響ハ約十分間繼續ス、噴火ノ際ハ灼熱セル岩塊、鞠ノ如ク噴火口内ヨリ拋出セラレ火光ハ噴火口内殊ニ西方ハ火口縁ニ近キ處ニ多ク認めラレ恰モ電光ノ如ク障子ニ寫リタルモ降灰ナシ。斯ノ如キ破裂ハ四十二年ノ春頃ニハ屢々アリタルモノニシテ大破裂ト云フ程ニモアラズト(中尾區民ノ談)又降灰區域ハ松本ヨリ保福寺嶺ヲ越ヘテ小縣郡上田町附近ニ達ス。

○於小縣郡別所 午後九時ヨリ三十分ニ至ル間火山灰ノ降灰アリ其量約雨量計中ニ積リシ分一分アリ(別所觀測所)

○於小縣郡浦里村 午後十時頃ヨリ約十時二十分頃マデノ間ニ於テ本村一帶ニ降灰アリ降灰ノ量夥シ(同村役場)

○於同郡上田 午後十一時部内上田町ヘ降灰アリ下略(上田警察署長)

○同於豐科 午後八時三十分西方山岳ノ鳴動スルト同時ニ黑煙天ニ冲シ豐科村明盛村降灰アリ、地上ニ積ルコト一分位ニ達ス下略(豐科警察署長)

○於松本市 午後八時三十分頃ヨリ部内錦村一圓ニ約一時間餘ニ涉リ降灰アリ今朝ニ至リテ檢スルニ硫黃ノ臭氣ヲ帶ビテ桑葉ハ悉ク洗ハザレバ蠶兒ニ給スルコト能ハザル趣ニ有之候條此段上申候也追テ他ノ農作物ニハ被害無之候(松本警察署長)

○於埴科郡屋代 昨夜(時間不明)部内南條村及中ノ條村ニ降灰アリ桑葉其他木葉

ニ白色ヲ帶ブル程度ニ至ルヲ以テ(中略)養蠶家ハ有毒ニハ非ズヤト憂慮シ居候
モ別段ノ被害無之狀況ニ有之候(下略)(同警察署長)

翌十四日實地ヲ調査セルニ山麓ニ於ケル降灰ハ上高地平野中
ニ於テ最モ甚ダシカリシハ其東縁即霞澤岳ノ山麓ニシテ灰雲
ハ同山ニ支ヘラレテ其山麓一帶ノ地ニ降下シタルモノ多カリ
シガ如シ。

山頂ニ於テ見ルニ風上ニアル部分ハ唯噴火口附近ニノミ降
灰アリテ他ニハ全ク無ク、唯火口縁ノ西隅字黒谷ニ於テ頂上
ヨリ約五百米許谿谷ニ添ヒテ降灰アリシヲ見タルノミナリ、
而シテ此降灰地區ト非降灰地區トハ明ナル境界ヲ有ス。

積灰量ハ頂上附近ニ於テ厚サ約七十糎ニ及ビ、其下部ハ粗大
ナルモノ多ク表面ニ近ヅクニ從ヒテ微細ナル火山灰ヨリ成レ
リ、而シテ其上ニ更ニ又大小ノ岩屑ノ點々トシテ散亂セルア
リ、特ニ山ノ西側黒谷方面ニ大ナル岩片ノ散亂セルコト著シ
ク、且又同方面(頂上ニ)ニアリシ三箇ノ硫汽孔ハ此際六箇ノ小
噴火口トナリテ熾ニ噴煙ス。(第十四圖版)按ズルニ中央火口内ニ
於ケル大爆破ニヨリテ騰上シタル灰砂ノ既ニ地上ニ降下シタ
ル後、此舊噴火口ノ外側ニアル三箇ノ硫汽孔底ニ小爆裂アリ
テ小噴火口ト變ジ、其際大小ノ岩塊ヲ四近ニ飛散セシメタル
モノナルベシ。

正午三角點基(第十六圖版)ノ下ニ達セシモ、噴煙孔内ニ漲リ其狀

態ヲ觀察スルニ由ナク、唯其ノ鳴響ノ著シク熾ナルト嘗テ見
ザリシ西隅ノ一箇所ニ新噴火口ヲ生ジ熾ニ噴煙シツ、アルヲ
見タルノミ。時恰モ昨夜ノ噴火後約十六時間餘リ經過セルニ
モ拘ラズ三角基近ノ地ハ猶高熱ヲ保チ、二三分間モ一所ニ止
ル時ハ足袋ヲ通ジテ高熱ヲ感ジ、永ク一所ニ止マル可カラズ
試ミニ積灰中ニ約八糎ノ深サニ寒暖計ヲ挿入シタルニ百〇五
攝氏度ヲ示シタリ。此時ノ空氣ノ溫度ハ約十度ナリ。頂上西南
側ノ凹地ニ於テ新ニ亞硫酸瓦斯及硫化水素ヲ噴出スル小硫汽
孔多數ヲ生ジ呼吸頗ル困難ナリ、此附近ニテ又地溫ヲ驗スル
ニ十五糎ノ深サニ於テ百〇五度ヲ又十七糎ニシテ百〇七度ヲ
測リタリ。

(22) 六月十四日

○昨夜ヨリ引キ續キ噴煙平日ニ數倍ス、午前九時煙噴熾トナリ上高地溫泉場附近
ニ降灰多シ、鳴響ヲ聞カズ(上高地溫泉場)

予ハ當時該山ノ西側ニ於テ噴火口ノ中心ヨリ徑約五百米ノ地點ニアリタルモ鳴
響モ感ゼズ、又火口底ハ勿論火口縁ヲモ見ル事ヲ得ザル所ナリシ故全ク之ヲ知
ラズ

(23) 六月十六日

午前零時半微ナル鳴響ト共ニ降灰アリ徑一糎大ノモノ上高地溫泉場ニ降下ス、
雨ト共ニ降り地上一面ニ灰色トナル又樹枝及樹葉ニ附着セル灰ハ容易ニ脱落セ
ズ、樹葉萌芽ノ周縁黒紫色ノ斑點ヲ生ズ。

(24) 六月十六日

上高地温泉場ニ於テ午後二時二十五分硫黃岳ノ頂上ニ方リ「ゴトゴト」ト云フ若石崩壊シテ相打ツガ如キ音響ヲ聞クト共ニ噴煙ス、此日西南ノ風強ク、朝來時々驟雨アリ、音響ハ瞬時ニシテ止ミ、灰ハ田代池ヨリ六百(霞澤岳ノ)ノ方ニ吹キ流サレ該方面ニ多量ノ降灰アリタル模様ナリ。(第十七圖 版参照)
上高地温泉場ニハ多量ノ降灰ナク唯硫化水素瓦斯ノ臭氣甚ダシ梓川ハ昨夜ヨリ増水數米、赤褐色ニ混濁セシガ午後四時(噴火後二時間許)ヨリ河水灰トナリテ流ル。

(25) 六月十七日

午後一時四十分下堀上流ニテ目撃セルニ中央噴火口内ニ方リテ「ゴトゴト」ト若石崩落スルガ如キ音響ト共ニ噴煙シ始ム、先ヅ噴火口ノ東端ヨリ淡褐色ノ煙少量ヲ噴騰セシメ、續イテ西隅ヨリ濃厚ニシテ青灰色ヲ帶ベル煙ヲ多量ニ噴騰セシメ、忽チ舊噴火口内ニ充滿シ徐々トシテ昇騰シ、其一部分ハ北東丘ト南丘間ノ鞍部ヲ越ヘテ下堀爆裂火口ニ下リ恰モ大河ノ一時ニ決スルガ如ク或ハ怒濤ノ澎湃トシテ襲ヒ來ルガ如ク、黒灰色ノ灰雲團ハ凄ジキ勢ヲ以テ低キニ從ツテ進ミ噴火口ヨリ約五百米ニ達シタル後東方ニ向ヒテ吹キ流サレタリ、高ク昇騰シタルモノハ西風ニ運バレテ霞澤岳ノ西側ニ多量ノ降灰ヲナシタリ、上高地温泉場附近ニハ降灰ナシ、此日ハ天氣晴朗ナリシ故温泉場ヨリ望ミタル噴煙ノ狀ハ壯觀ニ値セシト云フ、又此日ノ降灰ハ松本島々間ナル波多村附近ニ及ビタリト
○本日午後二時頃噴煙シ一團ノ黒煙ハ高ク天空ニ漲リ、折柄ノ西風ニ吹キ流サレテ信濃方面ニ没シタリ、當地ハ降灰ナシ、別ニ鳴動ヲ感ゼス(平湯大霜氏)

(26) 六月二十二日

六月十三日ヨリ連日小噴火ヲ續ケタルガ漸次各噴火ノ間隙延

長シ又其勢モ減却セルガ如クナリシモ、二十二日以來再ビ其勢力ヲ挽回シ二十四日ニ至リ稍々猛烈ナル噴火ヲ見ルニ至ルモノニシテ、二十四日ニハ風威強大ナリシ爲メ山麓地方ヨリモ却テ遠距離ナル木曾福島地方ニ降灰スルニ至レリ。

○於上寶村平湯 午後七時十分遠雷ノ如キ音響ヲ發シテ噴煙シ同八時三十分ヨリ當地一帶ハ降灰甚シク翌朝七時ニ至リ漸ク歇ミタリ、當時微雨アリシヲ以テ降灰ハ多ク草木ノ葉上ニ止リ翠綠ヲ以テ飾ラレシ野山モ一面ニ鼠色トナル、一旦葉上ニ止マリシ灰ハ翌朝日光ニ乾キ風ノ爲メニ飛散シテ煙霧ノ如ク、硫黃ノ臭氣紛々タリ、降灰中試ミニ八寸大ノ皿ヲ以テ之ヲ受ケシメタルニ直徑六分大ノ灰球ヲ得タリ、當時ハ東北風アリシヲ以テ僅ニ二里ヲ隔タル本村一重ヶ根地方ニ降灰ナカリシ由、信濃白骨邊ハ夥シク降灰アリタリト云フ(平湯觀測所主任大霜氏)

○於白骨温泉 午後九時三十分多量ノ降灰アリ同十時頃止ミタリ約一分積ル(安雲村長齋藤氏ノ談)

(27) 六月二十四日

○於平湯 本日午前四時四十分大噴煙ヲナシ、黒煙濛々トシテ天ニ漲リ漸次擴大シテ當地ノ天空大半ヲ覆ヒ下界爲ニ暗黒トナル。黒煙ノ一部朝日ニ映ジテ紅ヲ呈シ、炳々トシテ輝ク光景壯觀ヲ極ム。折柄北風強クシテ南方へ頭上ヲ通過セリ。通過速カナリシヲ以テ當地ハ甚ダシキ降灰ヲ被ラズ今尙盛ニ噴煙中人心恟々タリ(大霜氏)

○於筑摩郡王龍 降灰午前六時ヨリ八時四十分マデ、風ノ方向同二十三日ヨリ二十四日觀測時マデ南、降灰ノ當時風力ハ殆ンド零。降灰量ハ桑葉ニ付キ之ヲ見ルニ薄ク散布セル如シ最モ大ナル桑葉面ニ降りシモノニ付測ルニ一葉ニ積リシモ

ノ米粒三分ノ一位。當時ノ狀況ハ空中恰モ春霜ノ如ク薄霧ノ如シ(王瀧農業補習學校)

○於上高地 午前七時頃噴煙セシモ別ニ音モナキ様子、煙ハ白骨方面ヨリ木曾路へ進行ス(溫泉宿主人加藤氏)

○午前七時ヨリ八時ノ間ニ於テ燒岳方面ヨリ西筑摩郡開田、三岳及王龍ノ三箇所ニ濛々トシテ降灰アリ、中ニモ開田村西野邊最モ甚シク行人ノ衣服ナド白クナリタル程ニテ夏蠶用ノ桑葉ニ多少ノ被害アリト云フ(六月二十四日信濃毎日新聞)

○於梓村 午前九時噴火ヲ始メ(中略)上高地溫泉附近へハ多量ノ降灰アリ掃キ寄スル位ナルモ被害ヲ認ムル農作物ハ更ニ無之モ溫泉村方面桑園ニ降灰セルモノハ養蠶ノ給桑ニハ多少ノ被害アル模様ニ有之候(梓警察署長)

(28) 六月二十七日

○於上高地 午後六時頃噴煙(溫泉宿主人加藤氏)

(29) 六月二十九日

○於上高地 午前九時頃噴煙(溫泉宿主人加藤氏)

○於平湯 午前十時大噴煙ヲナス(大霜氏)

(30) 七月七日

○於上高地 午後一時三十分約二十分間大音響アリ、當館障子鳴響、噴煙ハ火口ヨリ北ニ向ヒ、穗高山ヨリ風變リ東ニ向ヒ進行(溫泉宿主人加藤氏)

○於平湯 午後一時五分大鳴動噴煙セシヤ否ヤハ雲霧ノ爲觀測出來ズ(大霜氏)

(31) 七月十日

○於平湯 午前十一時二十分音響ト共ニ大噴煙(大霜氏)

○於高山測候所 (前略)午前十一時頃ヨリ二三回遙カニ遠雷ノ如キ鳴響ヲ聞ク又當夜硫黃岳方面ニ電光ノ如キヲ認ム云々(高山測候所)

(32) 七月十二日

四十二年三月以來ハ大噴火ニシテ噴火口ノ模様一變セリ詳細ハ追録竝ニ第五圖版第五圖ニ就テ知ルベシ

○於平湯 午後七時四十分大音響ヲ發シテ噴煙シ電光閃々タリ當地ハ障子振動セリ、振動ノ烈敷事及電光ヲ認メタルハ今日ヲ以テ初トス(大霜氏)

○於上高地 午後七時三十分頃大鳴動噴火、南安一帶降灰仕リ候(中略)一昨日(十五日)登山致候處(中略)中尾峠ヨリ分岐火口ノ方面ニ登ル約三四丁登リタル所ニ大石新ニ現出セリ、西村先般御伴ノ節ハ無キモノ、由、十二日ニ噴出シタルモノト存候、中尾峠ノ前後十町位下迄大石落チ居リ候歩行スルモ物凄キ程(中略)(上高地溫泉宿主人加藤氏)

(33) 七月十七日

○於上高地 午前二時三十分頃鳴動、初メ約五分間黒煙吹キ出シ南ニ向ヒ大野川方面ヨリ木曾ニ出デシナラン、是又大石ノ落ツル音等聞ユルモノニ候(中略)本朝噴火止ムト同時ニ大雨水ヲコボス如ク(下略)(上高地溫泉宿主人加藤氏)

摘要 今ヤ噴火事項ヲ蒐録シテ本章ヲ結ブニ當リ全噴火ノ形勢ヲ總覽スルニ、噴火ノ時期ヲ四期ニ分ツヲ得ベシ。

第一期 四十年十二月

第二期 自四十二年一月至同年六月(三小活動期ニ分ル)

第三期 自四十二年十一月至同年十二月

第四期 自四十四年六月同年至七月

第一期ハ噴火ノ初期ニシテ著シキ活動ヲ見ズ。

第二期ハ四十二年ニシテ一月ニ稍著シキ活動アリ、長野方面ニ降灰アリ、後活動ノ報無ケレバ漸次靜穩トナリタルガ如キ

モ、約二箇月ノ後三月十三日及同月二十三日ノ大活動トナリテ現ハレ其ノ後約二箇月間ハ小活動ノ連鎖ニ依リテ連リ五月

九日ノ大活動ヲ惹起シ其後ハ漸次沈靜ニ赴ケリ。即第二期ハ一三及五月ノ三箇ノ小活動期ニ分ツヲ得ベク、各期ノ繼續時

間一箇月許ニシテ小康アリ、然リト雖又此等三期ヲ通ジテ一

大活動期トスルヲ得ベク就中活動力ノ最旺盛ナリシハ三月トナス。

第三期ハ活動頗ル貧弱ニシテ中ニ就テ稍見ルベキハ十一月三十日ノ噴火ナリ、其降灰諏訪ニ達スト雖由來降灰區域ハ當日ノ風威ニ關スルコト多ク其ノ區域ニ依リ直チニ活動力ノ大

小ヲトスベキモノニアラズ。

第四期ハ例年ニ比シテ稍遲延シ六月マデ噴火降灰ノコトナシト雖六月初旬ニハ頂上ノ噴煙ハ漸次旺盛ニ趣キ遂ニ六月十三日ニ大活動ヲ演ジ降灰遠ク上田地方ニ達シ、其後活動ハ連續七月ニ及ビ其十二日ニ再ビ大活動アリ其後漸次沈靜ニ歸ス。

由是歸納的ニ硫黃岳活動ノ習癖ヲ觀ルニ大體次ノ如キモノアルガ如ク察セラレ。

ルガ如ク察セラレ。

○時期ハ冬季ヨリ春季初夏即積雪時期ヲ選ブ(硫黃岳ノ頂上附近ニハ六月初旬雪ヲ見ル)

(猶少量ノ殘)

○大活動ハ略隔年ニ發ス

○一活動期ニ入ル時ハ多少ノ消長アルモ連續活動スルコト約一箇月ニ互ル。

○活動旺アル年ニハ約一箇月餘ヲ隔テ、大活動アリ、其間ハ小活動ニ依リ連續サル、

○噴火ノ最モ多カリシ時間

午後八時、次デ午後十一時、午後二、三時

○噴火ノ最モ少ナカリシ時間

午前一二時、午前七時、午後四、五時、(第一圖版參照)

午前一二時、午前七時、午後四、五時、(第一圖版參照)

第三章 降灰及被害

第一節 降灰

硫黃岳噴火ニ關スルノ諸報告ヲ綜合スルニ其降灰區域ハ常ニ